

呪符木簡「天形星」から見る備後地方の疫病対策

藤井隆晴
(引野研究室)

キーワード：天形星・牛頭天王・蘇民将来

はじめに

私がこのテーマを選んで調べようと思った理由は、昔から陰陽師や魔法使い、それらが使う呪術や魔法に強い興味と憧れを持っていたからである。そして日本史などを勉強し、実際に行なわれていた呪術に関することを学び、ますます興味が強くなった。そこで、私の住んでいる近くの草戸千軒町遺跡からも呪術に使われたように見える遺物が発見されていることを知り、その遺物について調べようと思いました。それは呪符が書かれた木簡、「呪符木簡」とよばれるもので、遺跡からは数種類のもので出土されていますが、その中の「阿天形星」と書かれた呪符の「天形星」について調べました。

第一章 草戸千軒出土の木簡から見る「天形星」とその正体

一章ではまず「天形星」とは何かということと、その後の変化について説明する。天形星とは天刑星とも記される道教の神で、木星のことである。牛頭天王とよばれる疫病を広める行疫神や疫鬼などを酢に漬けて食べる恐ろしい神として巻物などの絵に描かれている。この天形星は行疫神や疫鬼を食べるところから疫病を防いでくれる神として人々に祭られてきた。しかしその後、行疫神であるはずの牛頭天王が、自分をもてなしてくれた蘇民将来とその子孫を疫病から守った説話によって、牛頭天王も疫病から守ってくれる神として祭られるようになり、天形星と同じものであると考えられるようになりました。さらに牛頭天王の恐ろしさから、牛頭天王のほうが上の立場になってしまいました。

第二章「牛頭天王」

二章では天形星と立場が入れ替わった牛頭天王について説明する。牛頭天王は、日本でおもに祇園系統の社にまつられている疫神である。もともとは中国の牛頭の形をした山が熱病に効ある梅檀を産出したところから、この山を疫病に利益ある神としてあがめたのに端を発し、インドの密教と結合して中国に伝わり、陰陽道の宿星の信仰をとりいれて、さらに日本に伝わった。日本では疫病、農作物の害虫、そのほか邪気を払い流し去る疫神の信仰と習合したとされている。

第三章『備後国風土記』から見る備後地方とスサノオ

牛頭天王について書かれたものを牛頭天王説話とよぶ。大同小異の変種があるが、基本的には自分に善行を施してくれた蘇民将来という人物の子孫を疫病から助けるという話である。この説話の一つに『釈日本紀』「疫隈の国つ社」の縁起『備後国風土記』逸文とよば

れるものがある。この『備後国風土記』も基本的なストーリーは変わらないが、最後に牛頭天王が自分はスサノオであるといっているところが違う。スサノオとは素佐鳴尊のことで、天照大神と月読命の弟とされる。鎌倉後期、蒙古襲来によって、神道説の日本中心説が盛んになっていく傾向を受けて、悪疫除災の神として信仰の厚い牛頭天王を、異国の神ではなく、日本の記紀神話の神として定着させる必要があり、スサノオとの習合が図られる結果になったと考えられている。三章ではこの説話に出てくる疫隈社が備後地方にあるという説を紹介し、スサノオとの関係について書いた。

おわりに

調べてみて、天形星から始まって牛頭天王、そしてスサノオにまで変化していったのは驚いた。その当時の時代背景や、宗教上の理由などで、別々の神が一つにまとまっていくのは面白いと思ったが、それだけ、その当時の人々が疫病などを怖がり、その対策としての呪術を必要としていたというのがよくわかった。しかし、ここまで「天形星」と「牛頭天王」、「スサノオ」の関係を書いてきたが、調べてみると、草戸千軒から出土した天形星の呪符は牛頭天王信仰とは関係ないものではないかと思えるようになった。そのことについて調べると、この天形星の呪符が何であるかが見えてきた。

参考資料・文献

- 岩本正二『吉備考古ライブラリ⑥ 草戸千軒』、吉備人出版、2000
川村湊『牛頭天王と蘇民将来伝説 消された異神たち』、作品社、2007
栗田一生「蘇民将来札について 長岡京跡出土の蘇民将来札を中心に」
佐野賢治『星の信仰 妙見・虚空蔵』、北辰堂、1994
武光誠『すぐわかる日本の呪術の歴史』、東京美術、2001
清明神社『安倍清明公』、講談社、2002
西田長男「祇園牛頭天王縁起の成立」『神社の歴史的研究』、塙書房、1966
脇田晴子『中世京都と祇園祭 疫神と都市の生活』、中央公論新社、1999
広島県立歴史博物館 企画展示図録『平成二年春の企画展 中世の民衆とまじない』、1990
『平成十二年度春の展示 中世民衆生活と文字 木簡が語る文化史』、2000